

東日本大震災 復興の道を共に歩む



東日本大震災により被災された校友の皆さまに、心よりお見舞い申し上げます。本学では、震災直後から対策本部を設置して状況に対応してまいりましたが、被災された地域の方々をより組織的に支援するために、立教大学東日本大震災復興支援本部を立ち上げ、活動を始めています。具体的な支援活動を行いつつ、教育・研究という日々の営みを着実に積み重ねていくことが、立教大学の使命であると考えます。今この時にもつらく不自由な生活を余儀なくされている多くの方々が、一日も早く安心して生活できるようになりますことを、すべての学生、教職員とともに祈り申し上げます。

立教大学 総長 吉岡知哉



セントポール ST. PAUL'S ALUMNI



■発行所
立教大学校友会
〒171-8501
豊島区西池袋3-34-1
■電話 03(3985)2634
■発行人 田尾 兵二
■編集人 石崎 孟

主なニュース

- 3面 ▶ 2011年度 地区校友の集い開催日程決まる
- 4面 ▶ 江草校友会長勇退インタビュー
- 8面 ▶ 義援金ご協力をお願い

3月11日午後2時46分、東北太平洋沖で発生した巨大地震と大津波は日本に未曾有の社会的・経済的打撃を与えました。震災当日、本学は東京都の広域避難場所として、市民を含む約4500名の帰宅困難者に、翌12日12時頃まで池袋キャンパスの教室を全面的に開放し、公共交通の正常化を確認の上で池袋駅方面へご案内しました。新座キャンパスにおいても同様の措置を講じました。その後、本学では計画停電やそれに伴う交通網の混乱等に鑑み、卒業式・入学式を中止し、前期の授業開始を4月11日から5月6日へと変更しました。

立教大学の支援活動

震災後、本学は「まずできることから始めよう」と、募金活動を通じた被災地の支援活動に取り組みました。そして震災発生から1カ月後、復興支援のあり方を再検討し、「東日本大震災に伴う立教大学の復興支援活動指針」を策定しました。指針にもとづき「立教大学東日本大震災復興支援本部」を設置し、各学部・研究科・事務部局等と連携しながら息の長い復興支援活動を展開します。それは被災地での復興支援活動だけでなく、支援活動の企画立案や関東圏域での支援活動も視野に入れています。また、教育、研究、及び社会貢献活動という大学業務のあらゆる分野において、全

地域立教会の被災状況

立教大学校友会では、被災地域の校友の安否確認のため、被災地にある立教会と連絡をとりました。各立教会の状況は左記の通りです。(4月27日現在)。

青森県は、八戸の沿岸部に大きな被害を受けました。町には日常生活が戻ってきています。
(八戸立教会 神山会長談)

岩手県は、報道にもあるとおり、沿岸部で津波による

学的な連携・協力の下、復興支援を進めます。
キリスト教の精神に基づき、「共に生きる」ことを大切に、被災者の方々との復興の道を歩んでまいります。

る被害が出ました。その他の地域では震災から1カ月後には、日常生活が戻りつつあります。
(岩手立教会 佐々木会長談)

宮城立教会会員の状況は、被災はしているものの、亡くなった方等の連絡は入っていません。しかし、震災から1カ月を過ぎて精神的に疲労がたまって来ています。なお、宮城県としては沿岸部と内陸部との被災状況が天と地ほどの差があり、そのことを被害が少なかった宮城県の地域でも受け止める必要があります。今後の復興には長い時間が必要で

す。
(宮城立教会 会員談)

福島県は地震と津波の被害の他に、原発問題が深刻

です。また、断続的に続く余震にも不安の色が隠せません。原発問題の影響により、強制的に避難させられている校友とは連絡がつかないなど、日常生活が戻りつつある一方で、終わりの見えない原発問題に不安を抱えています。
(いわきセントポール会 佐藤幹事長談)

茨城県の被害は県内で差があり、北部や沿岸部が比較的大きな被害がありました。幸いなことに、校友からの被害報告は受けていません。風評被害による影響はあるものの、日常生活が戻ってきています。
(茨城立教会 広瀬会長談)

義援金ご協力のお願い

立教学院は被災地を支援するために義援金口座を開設するとともに、被災した新入生・在学生の緊急救済金を募集しています。また、校友会は被災地の立教会を支援するために義援金口座を開設しました。校友の皆様のご支援を、心よりお願い申し上げます(詳細は8面をご覧ください)。

時計台



3月11日の東日本大震災により被害を受けた。校友をはじめとする多くの被災者の皆様に心よりお見舞い申し上げます。▼国内観測史上最大、マグニチュード9.0の大地震、私はその時新宿にいたが、揺れ方が明らかに今まで経験したものとは違い、出来るだけ広いところへと思ひ、とりあえず東口広場前まで行った。そこで大型ビジョンを見ながら想像以上の事態が起こっていることを知り戦慄が走った。CG映画かと思紛う衝撃映像であった。▼その後、4時間弱をかけて歩いて自宅まで帰ったが、主要道とはいえこれだけ多くの人達が行進しているのは、異様な風景だ。さすがに東京はそれほど大きな被害はなかったが、それでも壁が剥がれ落ちたビルや、棚から落ちた酒瓶を片付けている酒屋など、それなりの様子を垣間見ることが出来た。▼帰るに帰れず一時避難した方も多かったが、その場所の提供に多くの公共施設とともに早くから立教大学は、受け入れを表明していた。およそ4500人の人が利用されたそうだが、その対応をされた職員の中にも同じように帰宅困難者がいたと思う。そのような中、交代で各教室棟の巡回・誘導を翌日12時ごろまで行った職員の方々や、余っていた食材を使用しておにぎりなどを作り、支給した第一食堂の方々がいいたことを後で知った。▼今、自分にできることは何か、改めて考えてみたい。

(前田 榮嗣 51社)

東日本大震災の影響により、今号は例年より1カ月遅らせての発行となりました。